

り、近年むかしにかへりて、蒔繪の木櫛はやるは、民歸樸といふべし。

〔嬉遊笑覽容儀一下〕葛藤集、證文に足手そらなる十年季秀朱ぬり。櫛は誰かみつらむ舟

〔賤のをだ卷〕一衣類の色も、其比賤寶は、丁子茶と云色流行出て、男女貴賤を論せず、賤者のひとつ

布子さへ、丁子茶に染て著たり、中櫛は朱ぬりの、山形の平たく横へ長きをさしたり、中其頃

の歌に、丁子茶と五寸もやうに日傘、朱ぬりの櫛に花のかんざし、とて貴賤吟みたり、

〔保元物語三〕爲朝生捕被處流罪事

九月元保元二年、湯屋ニ下タル時、三十餘騎ニテ押寄テケリ、爲朝眞裸カニテ、合木ヲ以テ數多ノ

者ヲバ打伏タレ共、大勢ニ取籠ラレテ無云、甲斐被搦ニケリ、季實判官請取テ、二條ヲ西へ渡ス、白

キ水干袴ニ、赤キ帷子ヲ著セ、髻ニ白櫛ヲ指タリケル、北陣ニテ叡覽アリ、公卿殿上人ハ不及申

見物ノ者市ヲナシケリ、

〔安齋隨筆前編九〕一五節櫛。五節ノ童御覽の時、舞姫御前に參りて、色々の紙を重ねて櫛を包た

るを、御前にさし置て退く也、御目とまりたる舞姫の櫛をば取召る、也、御前に櫛置たる體、古キ

五節の繪卷物に見たり、

〔公事根源十一月〕五節 同日、中丑二ある時は、上ノ丑ヲ用、式ノ下ノ丑の日ヲ用也、

中ノ丑の日をば、五節ノ帳臺試といふ、常寧殿にて主上御覽あり、五節舞姫は五人なり、中御殿

の廂にて亂舞あり、くしなどををかる、昔は年々におこなはる、いまは大嘗會の時より外はなき

にや、

〔雅亮裝抄〕五せち所のこと

五せち所にかむだちめたちいられば、くしは、やなるばこにいれてまいらすべし、中

ひめ君のさうぞくどらの日略、中